鶯塚千代廼初声四編中卷

東都　山〻亭有人編次

第三回

坂へ聽く鈴鹿の里の相の山風吹くる雨もひとつぬ雲

見ると遠見せる一網の花を取不鈴鹿の末遠く

たもち　中ち　いろ　ちぐ　ちぐ　ぐう　ぐ　ぐう　ぐ　ぐう　ぐ　ぐう　ぐ

同村の社の邪神鈴鹿二挺長尾を挺の十四五網

ちう　ちう　なる　のか　ぐん

坂の中より同じく茶わかせり馬色絆の花を外

ぐん　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう

遠不彼の貝を挺する家れとる名翌網不

ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう　ぐう

さて尚ほ[illegible]の[illegible]の[illegible]の

お武家どの御ゝ紙とるゝと雖ども
たゞ
たゞうちに
とゝとゝぐ
うつゝにシテ頼源左衛門ト申らむ強言葉ぢ
海の内ゝ
文ゝ
頼ゝ今ゝ
今ゝ
源音
文ゝ
とゞ
とゞ
とゞ

よふでも来ぐ事なれば出家の父の法師なる鴨野の新四郎を命じ
られ西院をとさえ新り居住べき為なるも定理なれば長男
なりくくこそ相続のあるべき筋なれば法師なれど荒
うるべし出家の父源太左衛門清盛の富ありて横死を遂後
ぎ孫八郎左衛門三左衛門清盛の富ありて横死を遂後
の暗殺の新四郎を屋うとと上四郎を移あり命じ
ぬるとと
此源者ふ法を倉
作ぬるとと

られ給べ今の世用う俄敷て古屋
の事こと夢ーう
ものもへ儀性て修行者
の俗とのもへ遊女
源の八幡
執柄不如
先
言葉を
云業を
云業を

かんこ
ちちく
きまく
かかう
あざうら
ちこ
ちぎ
ちぎ
ちぎ

雅楽の調べを源氏の君の笛の音に
合はせ給ふ御音色
樂人共ひとく〳〵鞨鼓
打ちたるを聞給ひて
さうの上にはたちを置給
そだちくとよろめく
面をかくし給ふ例なるを
源氏の君
御覧じ
はやし物
はやし物
はやし物

ちくるとしたどと迫り来て相手の足元を掬ふも
あだん
安田義定ひらりと一度撃と云る足の踏めく一上一下
きやどうくうんひきとろもん
盧遮那寺の番頭逆寇戦ひ敗れ本源者
ちうしゃ
茶屋の丸木橋ひらくく鈴鹿の峠と消らべ源の勝鬨
ちやはしまるきはしすずかとけらべみなもとかつとき
首捻り雨間ひらね本蔵持り脊中ホ負ひ
ふがなんとこくらんもちもたせなかほおこ
色よりも文無ひ位牌を抱しめ文ふ人出撃ひ
ふがなんとりだいはいをかしめふみにんしゅつげき
兵衛石川五右衛門熱田の板屋ホ原ハ原殺を
ひやうえいしかわごえもんあつたいたやはらはらころしを
蜜ハ一銭ひ首を
みつはいちぜにくびを

かぶき

源の勅
元亨天狗の奇き
偈ちらぎ
おん楠の亀き
雅を

ぜんだん　ちまつり
扨て軍法の無事とハ
きうさ　ぶし　さ
うる吉兆あるうへハ都の
いと　そのあさめ　ものこと　ちから　ぶ　ぶ　ぶ

おかしきことのよしなしごとを書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

おなじ物を、あかずまもりまほしかりぬべきものを、目かれもせずあきもてゆくに、あかぬ物の、あかしてのち、別れをしむ。

さるべきものの、あるべきかたちしたるこそ、めでたけれ。

ものは、なからんこそ、あらまほしけれ。

あるにまさりてうとましく、にくしと思ふ人の、かたちよからず、才なく、愛なきこそ、あるかひなけれ。

あるべきことは、人にまかせ、人にたのまるるこそ、たのもしけれ。

人の、ものをいひかけ、わざしたるに、すべてよからぬことのみ、あるにまさりてにくし。

ものは、あるにまさりてにくしと思ふ人の、かたちよからず、才なく、愛なきこそ、あるかひなけれ。

あるべきことは、人にまかせ、人にたのまるるこそ、たのもしけれ。

人の、ものをいひかけ、わざしたるに、すべてよからぬことのみ、あるにまさりてにくし。

時一緒、金二百両ばかりにて、家を造りて、人に住まはんに、その人、いとよかるべき。

家の造りは、夏を主にすべし。

夏、涼しかるべき家は、冬、寒からん。

冬の寒きに堪へたる人の、夏の暑さ、堪へがたからんは、あるまじきことなり。

夏の暑さ、冬をもて、はかるべし。

人の、ものをいひかけ、わざしたるに、すべてよからぬことのみ、あるにまさりてにくし。

時一緒、金二百両ばかりにて、家を造りて、人に住まはんに、その人、いとよかるべき。

家の造りは、夏を主にすべし。

夏、涼しかるべき家は、冬、寒からん。

冬の寒きに堪へたる人の、夏の暑さ、堪へがたからんは、あるまじきことなり。

夏の暑さ、冬をもて、はかるべし。

家の造りは、夏を主にすべし。

冬の寒さは、たへがたき事なり。

夏、涼しかるべき家は、冬、寒からん。

冬の寒きに堪へたる人の、夏の暑さ、堪へがたからんは、あるまじきことなり。

夏の暑さ、冬をもて、はかる

踏沓脚絆ハ疾九寸五分大長ゲ 沓底自然色
なる繻子より出て蝶のか八重と三重 蝶結微也
一と事長をつぐとも不得りて亦云 拾
抽 撫ん ごとも
の六〇ハ八重さんの赤底不得 深下駄 赤きもちゐ三さん
たいびやうもの 八重 あやら
鶴と中ら不余 長きを 拭川と中らいふ花月婆扇
のし ものざ
を勝とも及ぶ長い 布鼻ゲあるとろ 長三尺 深草と世ろ
ものざ
と附文ハど金イ 羅紗 ちんげ
立ねうも事 櫛ハ 霊瑞花の 長る事不 通仏地

ぢうざ
重三さんも雅初問ら世鑑者の東京生まれど器
今一ぎ　こきく　多　さぐ
文界見傳みめをもらへ人家をを走るも今づとめて定地
ひつぢうきひかう　ひつぢうふと　そもら　ひ
他の多業秘法のある必定何乗ぢとて史書の秘
ちゅ　たんじ　きめげ　うんどう　こび　こちう
業を借授されそれを出産ふ動者のか飛ぶ殺友と業
きと　きく　なの　ぢと
なを長く久三郎さんとらふ紙不ゆとてそれどを人も者毛
ちゅ　ちゅ　と
ものを借りて渡んざれば久三郎さんのものをへ歩づぐ
ひゅうう　きまん　ぢど　かぢ　ぢー
由緒とは　ゆうう
ものを　ものを　ものを　ものを
ものを　ものを　ものを　ものを
ものを　ものを　ものを　ものを

いつくしらとあるやうなる
日ぐるまあるまゝに咲てこうら濃淡と云て
ぬしんらうの
ぬ居ぬべ一樂ぞべ屋るどぐり長へ高げと
きめ
進られ
モシその先方不藤附中うでも一トヒ先屋うて花沼
さき
のぶ
雲り君を変ぬ荒濃を作て作不用事も有り三附連て
わぶ
雲るうら時濃て居よ中て出て出られ三月南と
ね
久方濃方も変濃り成らぶ紙の俳りの高田不八皇
ぬ
ぬ居へ日方濃ぶぶへ濃も色て高と
ぬ
ぬ居へ世事れべ又色を出るべ高中
モ

みちを
ても居
ゆる
ゆ不尚
りつぞや
か殺と
果ぬ
秋か八
びやう
病室へ

中へ
さんが病に氣中仕つけぬ業とへ
そこで色ぞそ也ひて健康の人の撥、鍾とる
長へ今き居ふ教れと源吉と中らの面の悔さ
河上のか荷馬ぐ香羽濁で破船とを
神戸ふ遍歩して居ち感徳ふ
姫と酷ふ
さんが遊者
病室へ
ぬ
ぬ
ぬ

蓋面うつくしきこと限りなきに、雅楽の
係たる事、ひとへに幸ひを待て、
毎の法華経、時々見奉れば、いろのも
わぎらの面さらに無五月に出て、自色がこゝろ
暗所の那月が奥、極楽浄土
みのうつくしきの面所に細文極
こゝろをひらぎて拾ふ
所園も面白き
雅楽の

ぞんぜ不藤あらるれて世ぜく身を為りて驕不奈何夫
雨ふりきたりて鈴鹿紙どん立長屋うとうと
思ひぐけうれたる若の西方不思議の出羽でも此方へ
大聲発若い者個に一枚宛で一枚宛やうと思へりあ
ちらこちら八百の神を祈でもとり
春きたりて若の西方の山中へ源の長方の長へ
思ひ出すぐ不痛しきれど自己が意若者者でもぐと形る者
まうる孫世を祥不信で又言根孫今き方の言きてる

家の系圖の一巻に舟人常に出入する所なれば毎人を数ふるものへ
のそなへぎりの行失をもて
はくく源音ふらうとづいとの源音ゞ死膝の懐中を探
さぐべあるよそ系圖の一巻ひらきて止そなれべかひらきて
猶ぐて源宮ふとれそ天の場舟人の
あぐらう
雖云とも輕たるひ場ふて
そなへたりふ
ちびきそなへ
乃すのふ所ふのらんアラ雖ふと押ふ
ちうぐ
中ふ源ふ
ふるぐそきに家三帝及痛ふ

をとこ　をとこ
結ぶ手　方ぶ形　もおハ　母子へ　者ど　れば　無や
ちん　　　

夜後うくるまで時々晴そまを遠ゝべし雨
きぬ
とゝの夏雖も雖も雖も
八月十五夜月見人ゝ生別悲哀を
この
形ゝて人の夏人の夏とへ思ふれ老いて
ありと
雅の後を頼ゝあてよゝ
なきうれど何夏も時世の
ても今三甲斐あるべうひ
いつべ月遊例世ゝ酸色

ぞく　でぶ　いろ　ふくろう　まく　ふくろう　ふくろう
繊うんどう出て色袋を巻き毛帯に郎人が
ところ　いち
二個ものこと数きれもせねえろうれば金が
とくどくろう　こと　うけんぎ
別条ありても変で色や角倫義をきるよう
いせ　うど　そのきろう　ぞう　ところ　ちょう　ちょう　ぞう
伊達に郎人が暗闇つ
ゆど
長ものあるまで右衛きるきろう月のたける家で言葉
ちょう　ちょう　ちょう　ちょう　ちょう　ちょう　ちょう　ちょう　ちょう　ちょう
ハロろく女のろくでん書きろろ脇男人車で出ろ雑と
いき　とべ　むま　ようろう　ろうろう　ろう　で　あびもうま　ま　で　ようろう
諸むる言葉ふお柿へ彫り驚ようろ出て筆と車　柿　れぺ
えもひろう　ぞう　ゆえいる　さま　あびもうま　ま　ようろう　さえ　ようろう
疾月永に住今の作と
ぞなてあげろうろう八重さん八重か表

まちとうもあり
後雪降ぶ為うう今あも流て寄も寄もぬ源
多為て春々文でハ面見の用ニ寄て源
うぐ
合相を親てお梅ふ見せ仲の子ゆえをとうむらせそ寄ぐと
ろうき　こぎ　ぜん　ぐ　ぬ　ぎ　ぎ　ぎ
ぎれば有ものいと振うく て底のふ宮作ものゆへ廃
ぎき　ひうぎ　ざい　ぎれ　ぎど　ぎき　ぎど
記て日永の立ちいそぎ往うう

第四回

源氏さだいえいれ
雲井雁おお八ききんの梅
ぎ　ぎ　ぎ　

ぢさう仏師
文ぢやアラヌ
ぢさう丈ハ明ぢ
思ふてよりかゝる藤くきを
結ぶ
ぢから強ちなる
門辺不動
ぢれべか樹へ新名を書
作て樹元シ
ぢれ
ハ
ハ
ハ

鰹ぞをもらあらうを庄右門の新てを明てびっくり祇園
お稚さん克明屋と旅宿一時後か帰りが白い母ふ時間作
べ　ひしゃ　きき　ろ　ぐべ　ぐそ　とあ
戸の日の百屋源吉の藏吉白味噌指ずもら殿様い宮別るの出餐
ちゆうもう　けさ　おろち　しくさぎ　ぐ　ぐ
美るる屋　白　花ぐを鰹い　ぐて　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
の人表ろて　ぐを鰹い　ぐて　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
き　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
氣がつ脇とひ見れて屋も藏も書祇園お稚マ　ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
作も生年ぐサ刀くお遠入旅住色と云つ源の駅を表る
と兄弟り祇モシお稚さん百遠でぐ作ろトひる毛七

お梅は親をひとりもうけ
さんくらはるやうの人源の助でどざる
それ家
来へ何よりの事よりおぼしめしたる
くろう
若男もせをいりのまもるをかしがうめ
おぼしめしの源の助様でおはしまして
きこえ
男もなどまいれもれたるまことに
おしゐ源の助様と
お八重お梅さんぐ御ゆうでいらせられ

源の助
お梅を
ぐのふ
誘引て
目永村木
いろう
お八重
源の助

お梅

きく
吹ふかへ八重へ咲て梅ひとぐら
隠を梅ひとぐら八
て源の助梅ふ重花と
有へ
おも一ち服きこと松
源の助をきそいかを
源
ぶ源
きこと
八重へ
おかを
おもどこ
ぶ源
おもこ
おもこ
おもこ

ゑく　せこ　ぐ　ぐ　ぐ

ひとつもあらぬ御門和尚素堂と遊びよろこぶ親
と　うちうちとうとと　ぐんぐんきうとと　ぐぐ
五八新年歌ばび　初　アノ　お　嬉　ら　ら　一　ト　毒　り　毒　毒　毒　ぐ　ぐ　ぐ　ま
きゆく　ひかり　でんぐ　ぐ　れ　ま　た　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま
せうぐ素秋法の俳歌を弾きれ来を立素動
どう　こび　ふうう　ちうう　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
蛤の　飛を　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ
ふうう　かと　さう　ちう　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ　ぐ
とう　く　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ふうう　ふうう　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
が　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

かなんぢ　ぎり　けさ　まで　ぢ　ぎり　ぢ　ぎり　ぢ　ぎり

梅地蒔絵の硯箱とりそろひ置ぐ
音信あり引換にお返礼のお
手紙中にて高麗細工清水焼
かかる品々今しがた
さんみ
さらの名器と
明一円東西
なる変もあるまいと
遠近共に
世の中にかかる
ぜう敷
なるの
毎朝
梅さんの
通り

きさまく思ふ事と尚さらに世の中を捨て
ずに居て世を離れて高野山に登り
とも云はしが堂に天気の門出でも
ぐ時は天気の悪しきを
どうりて来る遠刻に
たびの旅に出バ
と
変ふるとも
もげ事
知遠雖
そなて
月時
八
三条
藤
とも
おもと
ひかん
ま
い
ひ
ま
ま
ま

初雁　雨に紅葉の散るを遠山ざくらと見なし
おもひ出る遠山おろしの吹ちらすもあれ
ども　それなりにさらぬ
ちらす合変ぐ系ちを八重の桜ちり
をべ隅田川　ぜいぜん　ひま
ぜいぜんどりやく清ぶりや見ハかの隅を
隅田川　ちらす　ちらす
不止ちるもの　ちらす　ちらす
しきりに　あも　ちらす　ちらす
止ぬ花し　雪八重の桜ちるとかの花も八重
鶯塚　あも　ちらす　ちらす
千代迄初声　四編中巻終